

不登校、そして登校——コウヘイと過ごした三年半——

第二回 四万十川へ、ベトナムへ

八木 絹

コスモは、子どもと青年の居場所づくりをすすめる
NPO法人文化学習協同ネットワークが運営するフリースペースだ。主宰者は、不登校、引きこもり、ニート支援に早くから取り組んできた佐藤洋作さん。小中学生年齢の不登校の子どもが集まる。一階では若者の就労支援事業としてパン工房「風のすみか」を運営している。階段の壁には、「四万十川冒険旅行」「ベトナム・スタディ・ツアー」の壁新聞が張り出してあった。佐藤真一郎さんは三〇代になったばかり。コスモの運営の中心だ。

「名前書いてみて」

真一郎さんはまっさきに「名前書いてみて」と言った。私にはなくコウヘイに。「じゃあ次は住所」。コウヘイは「四―三―一九」と番地から書き始めた。「外国だとそれでいいんだけど、日本では市の名前から書いてね」。子どもの間違いにたいして「ダメじゃないか。番地は後だよ」と否定するのではなく、こんな反応をする人がいるのか。それまで学校で接した誰とも違う。なにより「どうして学校に行かないの？」と聞かない。コウヘイは口を開くなり「四万十川には飛行機で行くのですか？」と聞いていた。そして翌々日からコスモに見学に来ることを約束して帰った。

コウヘイは早起きして電車とバスに一人で乗りコスモに出かけるようになった。見学の初日にもう「コスモに入りたい。四万十川に行きたい」と言いながら帰ってきた。四万十川冒険旅行はコスモ恒例の夏の行事で、体力に自信のある一〇人ほどだけが参加する超ハードな旅だ。東京から夜行バスで高知市まで行き、鉄道で四万十川中流へ。太平洋岸の河口までの七〇キロを八月の炎天下歩いて下る八泊九日（うち車中泊二日）。一番多い日は一四キロも歩く。五年生のコウヘイはその年の最年少参加者で、中学生や高校生年齢のお兄さん、お姉さんについて歩いた。背負うと背丈を超える登山リュックは重さ八キロ。テント、食料、水、ガスボンベは手押し車に乗せ、交代で腰ひもで引く。コウヘイは途中一度、だけ手押し車に荷物を乗せてもらったが、あとは自分で背負い最後まで歩いた。

公園の水道で頭を洗い、川の水で洗濯、川に潜ってエビを捕り、料理して食べた。一番面白かったのは沈下橋からのジャンプと、「寝相が悪くてテントごと転がっていつて、気づいたら川のそばだった」ことだ。お遍路さんに優しい高知では、子どもたちの旅に地元商店の女性社長さん、市役所の方などたくさんの人

が声援を送り、鯉飯やそうめんを差し入れてくれる。最終日、太平洋にたどり着いたとき、目をつぶってみんなで手をつないで堤防の上まで歩いたそう。だ。「そして目をあけたとき、ワー—————って叫んだ」



四万十川河口に到達した子どもたち。目の前は太平洋、右から3番目がコウヘイ。

撮影：佐藤真一郎氏

とコウヘイが話してくれた。帰ってきたコウヘイは真っ黒に焼けて、別人のようだった。声変わりもして一回り大きくなっていた。

四万十川から帰ってきた子どもたちを、親や留守番の子どもたちが出迎えた。これまでも参加経験のあるHくんが語った感想に驚いた。「初めて参加したMちゃんやコウヘイが、足が痛いの到最后まで歩き通したのが立派だった」。自分が辛かったことよりも先に仲間のことと言える。初めての参加者に心を配りながら歩いていたのだ。

コスモでは勉強は自主的にやる。企画をみんなで決めて毎日を通してルールだ。長野県で田んぼを借りて稲作もする。コウヘイは代掻き、種まき、田植え、草取り、稲刈り、脱穀のすべてに参加し、一年かけて世話をした米を食べた。五年生の終わりの三月には、ベトナム・スタディ・ツアーに参加して、ストリート・チルドレンの生活施設「子どもの家」に泊まり込んで交流した。「コウヘイコール」が起ころほどの人気者だったそうだ。

コスモでは通算一年半、六年生の冬までを過ごした。四万十川、ベトナム、農作業のすべてがコウヘイにとっ

ては冒険だった。そのなかで自分の居場所をみつけたこと、自分と同じ不登校の仲間がいるということを知ったことが、コウヘイにとつての成長の旅だった。

「どうしてフリースクールなのかですか」

小学校六年生の六月、コウヘイは日光移動教室（修学旅行）に参加したいと言いだした。このときは担任がA先生にかわっていた。「日光に行くなら準備から来てください」と促され、登校して準備の学習を始めた。一年数カ月ぶりの登校だった。A先生は五〇歳代の女性、子どもをまとめるには定評のある先生だ。先生は登校したその日に止めてあった給食を再開し、昼には給食が用意されていた。

コウヘイはなぜ突然日光に行きたがったのだろうか。修学旅行に行かずに小学校を終えるのが嫌だったのか。長く学校に行かなかったのに友人がどう接してくれるか不安はなかったのだろうか。しかし友だちがみな温かく迎え入れてくれて、楽しい思い出になったと満足して帰ってきた。

ところが日光から帰るとA先生から電話がかかるようになった。今後学校に来られるのではないかと期

待して、「明日も来てくださいね」と毎日促していた。

いわゆる“登校圧力”がコウヘイには負担だった。案の定、日光から帰ると学校には行かなくなった。

ある朝、A先生の猛烈な怒りの声が電話の向こうから響いてきた。「給食を止めるとはどういうことですかっ!」。学校に行かなくなったコウヘイの給食を休止してほしいと副校長（東京都では教頭が副校長に名前をかえた）に私が頼んだのだった。「私は給食も用意して、テストも机もみんな用意して待っているのですよ。それをなぜ親が先回りして学校に來させないようにするのですか」とまくし立てられた。食べないのに給食費を払い続けるよりも、行けそうになったら再開すればよいというほどのつもりだった。

「本人はどうしていますか?」と聞かれたので「フリースクールに行きました」と答えると、「どうしてフリースクールなのですか。どうして学校に來させてくれないのですか」と怒鳴られた。さらに「だいたいコウヘイくんはどうして日光に行ったのですか? 子どもたちはコウヘイくんを我慢して班に受け入れたのですよ」。一瞬意味が分からなかった。「私たち家族がどれほどコウヘイに学校に行ってほしいと願ってきた

か。でも学校には足が向かないのですよ。だからフリースクールに行くのではないでしょう。か。お友だちも我慢して受け入れたのではなく、一年生からの仲間だから迎え入れてくれたのではないのでしょうか」と言い返すのが精一杯で、受話器を持つ手が震えた。

あまりの無理解と、コウヘイと友だちへの侮辱は許し難く、すぐに校長に抗議した。移動教室にだけも行けたことをなぜ喜んでくれないのか。本当に子どもたちが嫌々コウヘイを受け入れたと考えているのか。学校に子どもを行かせたくない親がいるとも思っているのか——頭のなかをぐるぐると渦巻いた。最大の驚きは、A先生も学校を構成する一員なのに、その学校が子どもに拒否されることの痛みがないことだった。この電話のことはコウヘイには話していない。どんなに傷つくかと思うととても言えないのだ。

学校とのやりとりで気づいたのは、不登校の子が急に登校したのに、集団的な対応がまったくなされていなかったことだ。私がもし担任なら、三、四、五年生時の担任がみな在籍しているのだから、不登校になった経緯を聞き、対応を相談するだろう。しかし対応は担任に任されていて校長との話し合いもされていなかった。

た。さきの電話でのトラブルについて、校長は指導不行き届きを認めてくれたが、それ以降A先生と顔を合わすことはなく、コウヘイは〇八年三月に小学校を卒業した。

分かるって楽しい

コウヘイは高校一年になった兄の受験や高校生活を見て、中学、高校に夢をふくらませていた。コスモの年長の仲間もそれぞれの進路に向かって準備を始めていた。コウヘイはコスモを早めに卒業し、六年生の冬から自宅で勉強した。小学校の範囲はそれまでもやっていたので、それを終えると、英語の勉強をしたいと言った。「友だちがまだ勉強していない英語なら、遅れないでやれるかも知れない」と、参考書と問題集を買ってきた。二カ月ほどで中学一年生の範囲を終えた。中学の数学も難儀しながら勉強した。これらのすべてを兄が面倒みた。兄は高校の受験勉強をしている時から弟に勉強を教え、高二の現在まで続けている。

これまでコウヘイは何かにつけて自信がなく、人かどうか思うか気にし過ぎるところがあった。私は「これからは学校に飲み込まれるのではなく、学校を“利用”

したらいい。タダで勉強を教えてくれるんだからね」と言うことにした。中学に入るなりコウヘイが言った言葉が忘れられない。「ママ、勉強が分かるって楽しいね」

彼を変化させたもうひとつはギターだ。兄がバンドを組んで家で仲間と練習するのを見て弾き始め、ビートルズやクイーン、押尾コータロー、エリック・クラプトンまで弾くようになった。友だちよりカッコイイ曲を知っているのはカッコイイことだ。

何が最善か

長い不登校の時期を経て学校へ行くという新しい選択をしたコウヘイだが、何が最善かはいまも分からない。学校へはあえて行かずに、自力で学び、道を開いていく青年もいるし、それを見守る親たちもいる。コウヘイにとって今後の学校生活が平穏かどうか分からない。いまは自分で選んですすむ子どもを信頼して見守るしかない。

ただ、コウヘイには、たくさんのことを教えてくれてありがとうと言いたい。このことがなければ、世の中に不登校の子がいることにすら気づかなかった。「東

京では毎日死にたいと思っていたのに、四万十川を歩いていると、一度も死にたいと思わなかった」と語ったMちゃん。彼女の声は聞こえてこなかったはずだ。不登校や引きこもり、就労不安で悩む子どもや青年たちの自立をサポートする仕事に心血注ぐ人たち、朝五時からパンを焼いて売り、自立のための力を蓄えている青年たち。こうした尊い営みがあることも知らなかったはずだ。

私もいつの間にか受験競争や学歴主義に取り込まれて、子どもにそのレールの上を歩くことを期待していた。不登校でレールを外れることに恐れおののいていた自分が恥ずかしい。勉強は競争のためでもなく、親や他人のためでもなく、自分のためにするのだということこそをコウヘイが教えてくれた。

いまは私より背も高くたくましくなったコウヘイは、これからどんな道を歩むのか。「心理学を勉強して不登校がなぜ起こるのか研究したい」と希望を語ることもあった。学校から離れて紆余曲折したけれど、その歩みはけっして無駄でも、回り道でもなく、豊かな何かに満ちていた気がする。

(おわり)

(やぎ きぬ・東京都在住)

十一・八秋の県民大運動―教育分野(2)

④全国一斉学力テスト結果は、市町村・学校毎に公表しないこと。

回答：文科省の実施要領に従い、県として市町村・学校毎の公表はしない。

⑤小学校1・2年で実施の少人数学級を3年生以上に拡大すること。

回答：よりよいものになしたいと考えているが、財政事情から国の基準に従わざるを得ない。

⑥教員採用試験において可否の事前連絡を依頼した県議・国会議員・市町村長や関係者の氏名を明らかに。回答：関係者に対する聞き取り調査を行ったが、その人の記憶に頼らざるをえなく、漏れがあつてはならないので公表はできない。なお、9月29日、可否を連絡した関係職員の処分をおこなった。

⑦学校給食をより安全・安心のものにすること。

回答：学校給食の食材は、市町村教員委員会の「学校給食委員会」で業者から選定している。県として安全・安心できるよう、その内容や添加材などの指導を行っている。

(内山)